

京都大学若手人材海外派遣事業 ジョン万プログラム(職員派遣)

平成25年度職員長期派遣海外研修報告書

|      |   |                                   |
|------|---|-----------------------------------|
| 研修者  | 職 名   | 清家 さやか                            |
|      | 氏 名   | 総務部人事課                            |
| 研修先等 | 渡航先国名   | アメリカ合衆国                           |
|      | 研修先機関名  | 日米研究インスティテュート(USJI) ワシントン DC オフィス |
|      | 研 修 期 間   | 平成25年 8月28日～平成26年 9月27日           |
| 研修概要 | <p>1. 概要</p> <p>京都大学を含む日本の8大学が共同で出資し運営している在米 NPO 法人である日米研究インスティテュート(U.S.-Japan Research Institute、以下 USJI)の Washington D.C. オフィスにおいて、およそ13カ月間にわたってその実務業務を経験することが研修内容であった。同時に、本学からの指示に基づいて、本学の行事や、「京都大学の国際戦略 2x by 2020」に関連する現地における調査、本学からの渡航者への各種便宜供与等を実施することも研修内容に含まれていた。</p> <p>2. 渡米にあたって</p> <p>まず、京都大学の事務職員が本学に在籍したまま1年間を超える出張を行うケースがこれまであまりなかったということから、渡米にあたって必要となる諸手続きの事前調査を行うことから本研修は始まっていた。</p> <p>移民弁護士と相談してJ(訪問交流者)という種類のビザを申請することとなったが、今回の研修先である USJI はビザ申請のために必要となる Certificate of Eligibility(日本でいう在留資格認定証明書のような書類。以下、COE)を発行する権限を有していないため、私の米国での研修プログラムをホスト・監督する別の米国政府公認の交流団体に依頼し COE の発行申請手続きを進めていたが、途中で他団体に変更せざるを得ない状況が発生し、またそのせいでビザの発給時期が遅れてしまうなど、流動的な状況の中で渡航準備を進めていった。</p> |                                   |

他に、共済保険、雇用保険、労災保険ならびに税金(所得税および住民税)についてはどのような取り扱いとするべきか、時には米国の会計士の助言を得ながら自ら調査し、ジョン万プログラム(職員派遣)の所掌部署であった研究国際部国際企画課(旧・国際交流課)とともに、学内関係部署と調整を行った。

### 3. 渡米後の研修概要

以上のような準備期間を経て、当初渡航予定だった5月から3~4か月遅れではあるが、無事、平成25年8月28日に渡米することとなった。

渡米後の研修内容は以下のとおりである。

#### <<USJI での実務業務>>

- Washington D.C.におけるセミナー開催等研究活動支援業務
- Washington D.C.オフィスの管理運営業務
- 連携大学からワシントン DC 及びその近郊に留学生している学生への人材育成・ネットワーク形成業務
- 法人・団体・個人からの寄附、助成受入活動業務

#### <<京都大学の業務>>

- NAFSA Regional Conference への参加
- JUNBA サミット・シンポジウムへの参加
- NAFSA 2014 Annual Conference & Expo への参加
- 京都大学の海外拠点オフィス設置のための事前調査
- University of Maryland 訪問
- American University 訪問

### 4. 渡米後の研修内容

#### <<USJI での実務業務>>

USJI は、冒頭で触れたとおり日本の8大学が共同で出資・運営している団体ではあるが、その事業内容や業務内容は大学のそれとは異なる部分が多かった。

主に、8大学所属の研究者が行っている日米関係等についての研究を支援し、その研究成果を、セミナー開催等を通じて発信し Washington D.C.における日本のプレゼンスを向上させることを大きな理念としていた。

研修概要

研修内容

## 研修概要

## 研修内容

### ○Washington D.C.におけるセミナー開催等研究活動支援業務

USJI では、半年に一度、複数のセミナーをおよそ1週間にわたって開催する USJI WEEK というイベントを実施しており、その開催ロジを経験することができた。具体的には、イベント開催会場となるホテルとの交渉、出演者や日本からのスタッフのための客室・イベント会場やAV機器のセッティングの手配依頼、同時通訳機材の手配、食事やリフレッシュメントの手配、セミナーのパネリストへのスケジュール連絡や移動手段の手配などを行った。派遣期間中の最後に開催された USJI WEEK では、セミナー全体の動きを見ながら各スタッフへの指示出しを行う業務を経験した。また Facebook や Twitter のようなソーシャル・メディアを通じてイベントの広報を行うこと、イベント開催後には録画した映像を編集して USJI ホームページに掲載すること、セミナー内容を日本語に要約して、USJI の賛同機関等向けに発信している報告書を作成する業務なども経験した。

米国のホテルとの交渉は、こちらから何度も急かさないとなかなか対応してもらえず、やっと提出された経理関係の書類も間違いが多いなど、忍耐を要する骨の折れる業務であったが、その商習慣などを学ぶことができ、大いに勉強になった。たとえばあるホテルでは、私たちが1週間にわたってホテル内のある会場を貸し切ってイベントを実施する場合、その期間中の売上目標額が総額として設定されるようで、その内訳に関しては、複数あるオプションの中から自分たちのイベント形態にもっとも都合のいいものが選べるようになっていた。たとえば「Aプランだと飲食費を最低〇〇〇〇ドル支払う必要があるがその場合の会場費は△△△△ドルとなり、また客室料金は一泊あたり□□□ドルとなるが最低でも〇〇室は予約を埋めること」「Bプランだと飲食費を最低◎◎◎◎ドル〜…」という風な具合である。日本のホテルでも同じようなシステムとなっているのかもしれないが、それまでこのようなイベント開催ロジ業務を経験したことがない私にとっては、見るもの・聞くことがすべて新鮮で勉強の連続であった。

USJI WEEK 以外にも、USJI は主に日米関係についてのセミナー、勉強会、米国議会スタッフ向けのブリーフィングといった多数のイベントを開催しており、その企画・立案を行うことが Washington D.C. オフィスの重要な役割であった。時宜を得たテーマを設定するための情報収集を日ごろから行い、開催時期やオーディエンスをどのように設定するかを含めて企画・立案する必要があった。しかし関連分野(国際関係、国際政治、経済学など)の知見が少ない私には、たとえばニュース記事や日米関係を専攻する学生または

## 研修概要

## 研修内容

知人の聞き取りから得た断片的な情報があっても、それを分析し具体的なテーマに落とし込むところまでは至らず、ハードルの高い業務であった。小規模な勉強会については、テーマ設定(たとえば経済安全保障、日米医療保険制度比較、など)やスピーカー選定といった企画・立案段階からの業務に携わることができた回も何度かあったが、今振り返ってみれば、たとえばテーマに応じて集客ターゲットを変えるなど、もっと工夫できる点があったのではないかと感じている。

米国の政治の中心である Washington D.C.には、政策立案・提言を行う研究機関であるシンクタンクが多数存在しており(The Brookings Institution, The Heritage Foundation など)、毎日至るところで様々なテーマのシンポジウムやセミナーが開催されている。それらのうち、日米関係、安全保障、教育といった USJI が掲げている研究分野と関連の強いトピックのセミナー等に参加してその内容を日本語で要約し、USJIに賛同して下さっている企業等へ Newsletter として配信するための報告書を作成する業務を担当した。トピックは様々な分野にわたり、また英語の発音もネイティブや日本語なまりのものから今まで聞いたことのないようなアクセントのものまで多様であり、聞き取りには非常に苦労したが、この業務を通じてリスニング能力が向上したように思う。

### ○Washington D.C.オフィスの管理運營業務

私が派遣されている期間中に USJI Washington D.C.オフィスが移転することとなり、その移転業務を経験することができた。具体的には、移転先オフィスの内装工事施工業者への指示・連絡、電気工事の手配、オフィス家具レイアウトの策定、家具の発注、コピー機のリース契約、電話・インターネット回線施工工事、オフィス家具運搬業者の手配、オフィスネットワーク環境の構築手配などを行った。

急いで新オフィスへの移転を進めないといけない中、たとえば電話線ひとつ引くにも複数の業者(内装工事施工業者・電気工事業者・電話会社)に各々別の作業を依頼する必要があったが、言語の壁も含め、まずそのような状況を理解するまでに時間がかかった。電話線の件に限らず、様々な作業を手探り状態で進めることとなり、私が思うところの米国文化の特徴である"分業化"と"ミスコミュニケーション"を存分に思い知ることとなった。

また、発注したオフィス家具の組み立てが不完全なまま納品されてしまったり、引き受けてもらったはずのサービスが最後までフォローされていないな

## 研修概要

## 研修内容

ど、無意識のうちに日本のような細やかなサービスが提供されることを前提として作業を進めてしまったために、最後になってうまくいかないということが幾度かあった。自分が望む結果を得るためには何度も交渉・依頼し、最後まで自分で徹底して確認することが重要であることを改めて学ぶこととなった。

よく言われていることだと思うが、米国のサービス業者は客と対等な立場で仕事をしているということを強く感じた。“お客様”的態度を取ると嫌われてしまうが、なかなか伝わらないながらも自分のやりたいことを一生懸命相手に説明すれば、親身になって協力してくれた。業者にいい仕事をしてもらうため、相手の労をねぎらい時には機嫌を取りながら、最後まで気持ちよく仕事をしてもらえるよう気遣う必要があった。そのようなビジネス文化の違いを学ぶ良い経験となった。

○連携大学からワシントン DC 及びその近郊に留学生している学生への人材育成・ネットワーク形成業務、および、法人・団体・個人からの寄附、助成受入活動業務

Washington D.C.には多くの日本企業(メーカー、商社、マスメディアなど)や独立行政法人がオフィスを構えていたが、ロビイング活動や調査・情報収集活動を行うための少人数のオフィスであることが多く、その結果、大きすぎず小さすぎず、また日本でめったに知り合えないような様々な世代・役職・業種の人と交流することのできる、凝縮された日本人コミュニティが形成されていた。世界銀行やシンクタンクといった機関に1~3年間在籍し調査・情報収集等を行う日本の省庁関係者や民間企業の方、また George Washington University、Georgetown University、American University といった伝統ある大学で国際関係や法律を学ぶ現役大学生や社会人留学生、National Institute of Health のような研究機関に在籍中の研究者、日本の特許庁に当たる機関があるためローファームが多く、そこに研修でやってくる知財関係者も多いようである。そのような人たちが短いスパンでやってきては去っていくという、非常に流動的なコミュニティが形成されており、ネットワーキングも盛んであった。

これらを介して、多種多様な世代・業種の人たちと新たな人脈を築くことはできたものの、特に派遣期間後半にかけてはそのような人脈を維持・発展させるために十分な時間を確保することができず、USJI の具体的な事業や新たな支援につなげるところまでは至らず、悔いが残った。

<<京都大学の業務>>

○NAFSA(米国の国際教育交流団体)の Region VIII(Pennsylvania, West Virginia, Virginia, District of Columbia, Maryland and Delaware)で11月に開催された Regional Conference に参加した。比較的小規模な大学およびコミュニティカレッジの留学生担当部や、アメリカ人向け短期留学サービスを斡旋している民間企業や NPO が、限られたリソース内で留学生を獲得しサービスを充実させるための具体的かつ実践的な方法やツールの情報交換を行っていた。複数のセミナー(セミナーテーマ:"海外同窓生を惹きつけるためのツール"、"大学院生のための短期留学プログラムについての討論"等)に参加した。米国の大学にとってもキャンパスの国際化はある程度重要な課題であるようだが、その国際化の具体的な手法というのが、たとえば“授業内容に国際的な視点を取り込む”といったことであった。どうしても言語の問題が絡んでくる日本の大学の国際化とは、何分、課題に対する切迫度や、状況が異なるような印象を受けた。

研修概要

研修内容

○JUNBA(サンフランシスコ・ベイエリア大学間連携ネットワーク。米国内に拠点を持つ日本の大学間の連携を図ることを目的としている)が開催した“国際的に通用性のある教育の質保証”についてのサミット・シンポジウムに参加し、米国および日本の大学認証制度のあらましや現行制度の問題点等に関する知見を得た。

○NAFSA の 2014 Annual Conference & Expo に参加した。約 400 に上る高等教育関連機関による展示や無数のセミナーが行われており、時間が許す限り複数のセミナー(セミナーテーマ:"コンソーシアムが大規模教育機関の国際戦略に与える影響"、"企業が留学経験者に求めるもの"他)に参加したが、今となればもっとブース訪問を行って日本留学に関心を持つ米国大学の開拓・情報収集等に時間を割けばよかったと感じている。

日本の学生の内向き志向が取り沙汰されて久しいが、米国でも、いかにして自大学の学生に海外留学への動機付けを与えると同時に、いかにその留学経験をより実りあるものにするかという議論が行われていた。その取り組みとして、留学経験をよりよい就職機会につなげるために、学生にキャリアについて意識させるための以下のような留学前・中・後のきめ細かなフォローアップを実施している大学の例があり、印象的であった。

## 研修概要

## 研修内容

- ・出発前:ワークショップ(国際的ビジネスマナー、レジュメ/ CV、ネットワーキング、ビジネスカード、海外インターンシップの見つけ方など)の開催
- ・留学中:キャリアカウンセリングの提供
- ・帰国後:報告会・ワークショップの提供、レジュメ指導、模擬インタビューの実施など

○京都大学が海外に拠点オフィスを設置するための事前調査を行った。実際に拠点設置場所としてターゲットとなっている都市に出向いての現地調査にまでは至らなかったが、Washington D.C.で得た人脈を利用して現地在住の日本人の高等教育関係者等にヒアリングを行うなどして、中間報告という形で事前調査の報告書を作成した。

○Washington D.C.と隣接している Maryland 州にある University of Maryland を訪問した。同大学に正規生として在籍している日系アメリカ人学生に大学を案内していただいた。日曜日に訪問したため事務オフィスは閉まっていたが、現役学生ならではの視点からの情報を得ることができた。

敷地内には大手銀行(Capital One)の社名を銘打ったフットボールグラウンドがあった。チケット収入やグッズ収入が大学運営に充てられるのはもちろんのこと、カレッジスポーツを通じて卒業生や周辺住民の愛校心を育むことで寄付収入にもつながるとのことだった。

メリーランド大学が提供している複数の特別プログラム(学生は、学業成績やコミュニティ活動への参加実績、人種/民族上の考慮等に基づき参加を許可される)のひとつに、Language House がある。中国語、フランス語、日本語等、複数のクラスターがあり、各々の言語を学ぶ学生が、Language House と呼ばれる建物内の各クラスター内で最大6人程度までの共同生活を行っており、その言語しか使用してはならず、学生は共同生活を通じて異文化コミュニケーションなどを身につけていた。

○Washington D.C.にある American University(以下、AU)の学生寮を訪問し、寮制度や施設の整備状況を視察した。

AU敷地内の大学直営寮は10棟あり、米国人学生と留学生の混住寮であった。学部生のみが対象で、大学院生のための寮はなかった。キャパシティの総計は3,500人だが、常に需要が供給を上回っており、訪問した際には3,800人が入居していた。新入生で入寮を希望する者は基本的に全員入寮させるという方針で、かつ、2年生以上の学生であっても現在寮に入居中で

|                                       |  |
|---------------------------------------|--|
| <p><b>研修概要</b></p> <p><b>研修内容</b></p> | <p>引き続いての入居を希望する学生も全員入寮させる方針のため、希望者数が定員をオーバーした場合、本来は2人部屋のところを一時的に3人部屋にするなどして対応している(その分賃料も安く設定する)とのことであった。</p> <p>Meal Plan という制度(AU 敷地内にある食堂などで使用できる食券のようなシステム)があり、寮生は全員加入する必要があるとのことであった。特に1～2年生は、2,287ドル(175 回分の食事/1セメスター毎)もしくはそれ以上の金額のプランに加入する必要がある。これは、一人暮らしを始めて間もない学生に正しく食事を取る習慣をつけさせるための制度であるとのことだった。</p> <p>寮は各セメスターの期間中しか運営しておらず、夏休みと冬休みの間は、学生は寮を出る必要がある。しかし、一部の寮は、夏休み期間中に、学外者(AU でシンポジウムや連続セミナーを開催するために一時的に滞在する研究者や職員、D.C.でインターンシップをするために一時的に滞在する他大学の学生など)のための宿泊施設として運営されているとのことであった。</p> |
| <p><b>研修成果</b></p>                    | <p>先述したように USJI の業務そのものは大学業務とは異なる点が多かったので、そのすべてを本学の業務に当てはめることはできないと思うが、以下のような形で応用・フィードバックしていきたい。</p> <p>本学の優れた研究成果を発信し本学の特に海外における本学の認知度やレピュテーションを高めるため、海外における本学主催の国際シンポジウムを開催することが国際戦略として掲げられているが、本研修により、<u>米国スタンダードでのシンポジウムおよびセミナーの開催方法や効果的な集客方法についての知見を得ることができたため、その経験を活かしたい。</u></p> <p>本学の国際戦略に海外拠点の設立が掲げられているが、この研修を通じて米国での法人運営やオフィス移転にかかる知見を得ることができたので、特に米国での拠点開設時の事務的支援を行うことができるものとする。また、今後、拠点への駐在のため教職員が長期にわたって出張あるいは出向する機会が増えると思うので、<u>自身が行った海外渡航にかかる総務的諸手続きのノウハウを共有したい。</u></p>          |

## 研修成果

本学では外国人研究者や留学生のための宿泊施設が不足している一方で、全部屋が個室として作られており、各部屋にキッチンやシャワールームが設置されている。しかし研修期間中に訪問した大学の様子や、留学生から聞き取りを行ったところによれば、米国の大学では、むしろ個室はまれで、ほとんどがルームシェアとなっており、シャワールームはフロアごとの共用が一般的で、本学と比べるとより多くの学生を収容できるように設計されているようである。本学もルームシェア型の宿泊施設を導入することにより、限られた敷地面積をより有効に活用すると同時に、学生同士の交流も活発となり、異文化間コミュニケーション能力や対人関係能力の涵養につながるのではないだろうか。

最後に、具体の業務ということではないが、本研修を通じ、USJI スタッフの高度なネットワーキングスキルや、常に費用対効果を意識した取り組み姿勢、PDCA サイクルに即した業務改善への意欲、教員と一丸となってスピーディに計画を実行する業務推進力を間近に見ることができた。ともすればつい忘れがちになるこのような業務への取り組み姿勢を常に意識し、国際化に限らず今後自分が携わることとなるすべての業務に活かしたいと改めて感じた。